



学生や市民が地震災害に理解を深めたシンポジウム

## 「防災対策 特效薬ない」

### 教授ら知見、市民と共有

**弘大で地震シンポ**

日本海中部地震から35年、十勝沖地震から50年という節目に合わせ、弘前大学理工学部は18日、同大で地震災害軽減に関するシンポジウムを開いた。地球環境防災学科の教授らが専門的な知見を披露し、集まった学生や市民ら約90人と共有した。

(太田佳希)

構造物の被害や耐震化の取り組みなどを紹介。「防災対策に特效薬はなく、取り組みに終わりはない。それでも、被害を防げなかったからといって対策をやめてはいけない」と強調した。

同日はほかに、前田拓人准教授、片岡俊一教授が登場した。

小菅正裕教授は「あれから35年—変わったこと、変わっていないこと」と題し、地震観測の現状について講義。50年前は地震の観測点が少なく、1968年の十勝沖地震は発生当日に命名されたが、その後の調査で震源が十勝沖ではなく三陸沖北部だと判明したことを説明した。

一方、高密度な観測網が敷かれている今も地震発生予測は難しい—とした上で「被災直後は経験を後世に伝えようと思っても、地震はめったに起こらないために世代が変わって忘れてしまう。この連鎖を断つことが必要だ」と語った。

上原子晶久准教授は、台湾で99年と今年2月に起こった二つの地震について、

※この画像は当該ページに限って東奥日報社が利用を許諾したものです。  
 東奥日報社に無断で転載することを禁止します。  
 [問合せ先]弘前大学理工学研究科  
 E-mail:r\_koho@hirosaki-u.ac.jp